

動詞内部の out の多義性について 文法化分析の問題点とその解決

長野明子・戸鹿野友梨

1. はじめに

現代英語において、動詞に編入された out は多義的である。次の (1a) と (1b) を比較していただきたい。

- (1) a. Naked mole rats breed readily enough with close kin. Although their preference is to **outbreed** [...] (Kotowski 2023: 146)
b. In the U.S. Orthodox Jews again far **outbreéd** their more secular sisters.

(1a) の outbreed は「コロニーの外で繁殖する」という意味で「空間用法」であり、強勢は out に置かれる。一方、(1b) の outbreed は「～より多く子を産む」という「比較用法」であり、強勢は out が添加する動詞、つまり基体動詞に置かれる。さらに、空間用法は基体動詞の項構造を継承するが、比較用法では項構造が自動詞から他動詞へと変化する。本稿では、このような動詞内部の out の多義性に関する問題に取り組み、out が (1b) のような適用態構造を確立しえた背景には、out と over の系列的関係が関与したことを明らかにする。

2. 先行研究とその問題点

Los et al. (2012) は、preverb+verb という形態をもつ複雑動詞を生成文法・構文文法の枠組みで研究している。(2) のように、現代オランダ語の複雑動詞には、分離型・非分離型というよく知られた区別がある。

- (2) a. Separable Complex Verb (particle + verb) e.g., *dóor-boren* 'to go on drilling', *óver-komen* 'to come over'
b. Inseparable Complex Verb (prefix + verb) e.g., *door-bóren* 'to perforate', *over-kómen* 'to happen to'

(Los et al. 2012: 3; 一部変更)

Los et al. (2012) は、分離・非分離動詞の種々の違いを、文法化 (Hopper and Traugott 2003) の結果として説明できるとする。文法化においては、元来自立的な語彙項目だったものが文法的機能を担う拘束要素へと変化する。また、意味も変化する。複雑動詞の場合、まず N, P, Adj, Adv という各品詞の語が動詞句の主要部である動詞に編入する。それで生成される particle+verb という構造の複雑動詞には数種類があるが、(2a) はそのうちの 1 種である。次に、(2b) は、particle+verb 構造の particle が自律性を失って prefix+verb 構造となったものとされる。

Nagano and Togano (2024) はこの理論を現代英語の out 動詞に適用し、「…(o)ut V…」という動詞句がまず編入構造として再分析され (3)、その後、複合構造を経て (4)、接頭辞付加構造へと変化したとする (5)。

- (3) ?a1350 Be harness **out sprange** þe harnepan.
the brains out sprang the brainpan
'the brains sprang out of the brainpan.'

- (4) 1621 A..second Brother liued, whose ill **out-sprung**..the elder.
'A second brother lived, whose vice sprang out of his elder.'

- (5) 1616 He hath in this action **out-done** his former deeds doubly. (Nagano and Togano 2024 発表資料より)

(1) で見た動詞内部の out の多義性は、「起点格から比較基準格へ」という意味変化 (Heine and Kuteva 2002) で説明できるとする。(3) の太字部分は particle+verb の段階で、out は「～から出る」という起点の意味を表す。(4) の太字部分は複合動詞の段階で、起点格要素が元来の 3 次元空間から点的なものへと変化している。そして、(5) の太字部分になると out は接頭辞であり、意味的には比較基準の意味を表すようになっている。

以上の文法化分析は out 動詞の多義性を原理的に説明することができるが、(o)ut は OE 以来副詞であること (Hiltunen 1983: 20-21) から、(1b) のように自動詞を他動詞にする適用態的接頭辞 (applicative prefix) になることは説明できない。例えば (6) では起点格要素は from によって導入されていて、out は副詞である。とすると、ここからどのようにして起点格要素を項としてとる out+verb 構造が発達したのかが不明である。

- (6) c1430 Be salte teris from hyre eyzyn tweyn **Out ran** as schour of aprille ful swyþe.
the salty tears from her eyes two out ran as showers of April very quickly
'the salty tears ran out of her two eyes as showers of April very quickly.'

(OED; Nagano and Togano 2024 発表資料より)

3. 問題解決のための仮説とその検証

このように、英語の out 動詞においては、文法化の起源と帰結にミスマッチが見られる。適用態的接頭辞を生じると予測されるのは、Adv に由来する複雑動詞ではなくむしろ P に由来する複雑動詞である (Los et al. 2012: sec.4.3)。この問題について、本研究では視点を変えて、out 動詞と over 動詞の競合という観点で問題解決を図つ

た。(7)がその仮説である。

(7) *out* 動詞の文法化は、初期段階で *out* が *over* を模倣するという段階を含む。

この仮説の根拠は次の通りである。Togano and Nagano (2024) および OED によると、比較用法の *out* 動詞は 15 世紀以降にようやく見られるようになり、その初期の事例には必ずと言っていいほど *over* 動詞が先行する。例えば *outlive* (15 世紀) に対して *overlive* (OE) が先行し、*outpass* (15 世紀) に対して *overpass* (14 世紀) が先行する。こうした語対は同義であり、*outlive* も *overlive* も「～より長く生きる」という比較用法の他動詞である。重要なことに、*over* 動詞は *out* 動詞と違って P の編入に由来する。起源語である *over* は P であり、Los et al. (2012) の理論からの予測通り、接頭辞 *over-* は、オランダ語でも英語でも自動詞について他動詞を作るという適用態的接頭辞用法をもつ。そうだとすると、比較用法につながる空間用法の *out* 動詞 ((3) など) は、同じ基体動詞を共有する *over* 動詞を模倣して作られた可能性がある。

(7) の模倣説を裏付ける事実として、3 種類のデータを提示した。第 1 に、Fradin (2019: 70-71) の定義によると、形態的な二重語 (morphological doublets) は単に同じ基体をもつというだけでなく同義でなければならないが、*over* と *out* は、この意味での二重語を確かに形成した。OED に記載されている 689 タイプの *out* 動詞のうち、256 タイプには対応する *over* 動詞がある。256 の *out/over* 動詞には、① 移動動詞ベースの空間用法で、他動詞か自動詞であるもの、② 境界を表す名詞を目的語とする他動詞であるもの、③ 有生名詞句を目的語とする他動詞であるもの、という 3 タイプがあるが、このうち、② と③ の合計 57 ペアは、次のように *over* 形と *out* 形が意味と項構造において同一である。(8) はタイプ②の例、(9) はタイプ③の例になる。

(8) *overpass* vs. *outpass* ‘go beyond a limit, a boundary’

- a. a1382 Pou hast *ouer passed* þe loos in þi vertues. ‘You have surpassed the renown in your virtues.’
- b. a1513 Rysyng of the water of Thamys..dyd moch harme by *outpassynge* his boundys in dyuerse places.
‘The rising of the water of the Thames did much harm by surpassing its boundaries in various places.’ (OED)

(9) *overlive* vs. *outlive* ‘to live longer than’

- a. a1387 Seint Bryde..*overlevede* him by sixty ȝere. ‘Saint Bride outlived him by sixty years.’
- b. 1472 In cas hereafter it happen You..to *outleve* our..Sovereigne Lord.
‘In case it happens hereafter that you outlive our Sovereign Lord.’ (OED)

第 2 に、タイプ②③の二重語の OED 初出例では、(8,9) がそうであるように *over* 形が *out* 形に顕著に先行しているか、あるいは、両者がほぼ同時期に作られていることを明らかにした。ここから、タイプ②③では、適用態構造を持つ *over* 動詞がまず作られ、それを模倣して *out* 動詞が作られたと考えてもおかしくないだろう。

第 3 に、二重語はいったん作られると、同義語回避のための競合解消を受けると予測される (Nagano et al. 2024)。タイプ②③の二重語の行方を Corpus of Contemporary American English (Davies 2008-) を用いて検証したところ、(i) *over* 形と *out* 形の両方がもはや使われていないケース (共倒れ、13 ペア)、(ii) *over* 形か *out* 形のどちらかが廃語となったケース (片方が撤退、19 ペア)、(iii) *over* 形はタイプ②で使われ、*out* 形はタイプ③で使われているケース (棲み分け、22 ペア) の 3 つのケースが観察された。(iv) *over* 形と *out* 形が同義で使われているケース (競合の継続) はたった 2 ペアにとどまった。つまり予測通り、いったん生じた二重語は競合解消を受けて弁別されたといえるようである。「～より V する」の意味の動詞はかつては *over* でも作られたが、今日では *out* のニッチとなっている。

4. まとめ

以上の考察をまとめると、現代英語の *out* 動詞の比較用法は、文法化という連辞的な変化に重なるように *over* 動詞との競合とその解消が起こった結果、生じたものであると考えられる。

謝辞 本研究に関して準備段階や学会当日にご質問やコメントを下さった多くの方々に深く感謝する。残る問題は筆者らのものである。本研究は JSPS 科研費 JP23KJ0258、JP24K03966 の助成を受けている。

主要参考文献 Los, Bettelou, Corrien Blom, Geert Booij, Marion Elenbaas, and Ans van Kemenade. 2012. *Morphosyntactic Change: A Comparative Study of Particles and Prefixes*. Cambridge: CUP. / Nagano, Akiko, Alexandra Bagasheva, and Vincent Renner. 2024. Towards a competition-based theory of word-formation: Core research questions and major hypotheses. *Competition in Word-Formation*, ed. by Alexandra Bagasheva, Akiko Nagano, and Vincent Renner, 1-31. Amsterdam: John Benjamins. / Nagano, Akiko and Yuri Togano. 2024. A grammaticalization analysis of the English differential eventive prefix *out-*. Paper presented at 57th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea. / Togano, Yuri and Akiko Nagano. 2024. The prefixal rivalry between *over-* and *out-* in Modern English and its unique characteristics. Poster presented at the 21st International Morphology Meeting.